

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

「文化」とキリスト教の諸問題を総合的に研究 —三つの研究プロジェクト・チームで—

キリスト教と文化研究センター長 水野 隆一



関西学院大学がキリスト教主義に基づき、教育を行う

ていることは、広く知られています。各学部においてはキリスト教の授業やチャペルアワーが行われています。これだけの規模と内容は、全国のキリスト教主義大学のなかでも誇れるものであると思います。

しかし、関学のキリスト教主義は、さらに大きな広がりを持っていきます。一、二四年の歴史を通して培ってきた、関学独自の「雰囲気」があります。それは、有形・無形の感化を、学生をはじめ、教職員など、この学び舎に集う者たちに与えていると言っています。

このような、はつきりと言葉にして表されないので、影響を与えているものを広く、「文化」と呼ぶならば、この「文

化」とキリスト教の諸問題を総合的に研究するのが、当キリスト教と文化研究センターの目的です。

この目的を実現するために、当センターでは、二〇一〇年度より、研究プロジェクト・チームによって共同研究を行う体制を作り上げてきました。二〇一三〜二〇一四年度には、「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」「現代文化とキリスト教」「関西学院におけるキリスト教主



義教育の展開」の三つのプロジェクト・チームを立ち上げ、それぞれが設定した課題に基づいて、研究を進めていきます（詳しくは、本ニューズレター内の「研究プロジェクト紹介」欄をご覧ください）。

研究プロジェクトの行う研究会は公開で行われますし、そ

「現代文化とキリスト教」第一回研究会

イスカリオテのユダはどのように描かれているか

『ジーザス・クライスト・スーパースター』、レディー・ガガ、『聖☆おにいさん』

七月一日（木）午後五時一〇分から、吉岡記念館会議室一において、研究プロジェクト「現代文化とキリスト教」の第一回研究会が開かれました。発題はこのプロジェクトの代表、水野隆一氏（当センター長、神学部教授）、参加者二六名。タイトルの通り、それぞれの作品でイスカリオテのユダがどのように描かれているかを、氏の専門である、文芸批評、間テクスト性の手法で読み解いていくものでした。以下はその要約です。

レディー・ガガ『Judas』では、イエスとユダが対比され、ユダを「愛する」ことの「反社会（体制）的性格」がはつ

の他にも、当センターは、講演会や公開講座を開催しています。どうぞ、これらの機会にお出かけくださって、関西学院における、また、さらに広く社会における、「キリスト教と文化」について共に考え、私たちの営みに加わってくださいようお願い申し上げます。

きりと認識されていることはその詞から明らかになる。またこのことは、プロモーション・ビデオの最後でレディー・ガガ自身が扮する女性が「石打ちの刑」で処刑されることによって、明示されている。

『聖☆おにいさん』においては、イエス手作りの「免罪符」（本人の言葉によって「効力がある」とされる）五枚によって、ユダが地獄を脱出することができたと言われている。これは、おそらく、日本社会で一般的に期待されている、キリスト教の姿を反映していると思われる（「神の子のアガペー・ブライスレス」）。

もはや古典となった『ジーザ

ス・クライスト・スーパー
ター』(一九七〇年アルバム発
表)では、ユダの視点で物語
が綴られていく(“Heaven on
Their Minds”)。この視点での
物語の結末は“Judas’ Death”で
歌われているが、「可哀想なユ
ダ」と歌うコーラスは誰の声
かは不明のままである。

「あなたは、みんなが言っ
ているようなものなのか。」
これらの作品ではユダの存
在はアンビヴァレントなもの
として描かれているが、新約聖
書の記述そのものがあいまい
で矛盾を含んだものであるこ
とから生じていると考えてい
いだろう。そして、現代文化
におけるユダに対する解釈は、
正統的キリスト教(聖書も含
めて)による解釈のアンビヴァ
レンスを明らかにすることに
なるだろう。

六月二七日開催・春期RCC講演会報告

ミッション・スクール——神戸の坂道から見えるもの

講師 佐藤 八寿子氏

『ミッション・スクール あ
こがれの園』(中公新書)の著
者である佐藤八寿子氏の講演
が六月二七日(木)に開かれた。
とある駅で下車して、坂道を
登校する生徒たちの姿から見
えてくるものは何だろうか？
どこの学校の生徒か見れば
すぐわかる、そのイメージの
喚起力とはなんだろうか？
ミッション・スクールにどこ
となくセレブなイメージが付
きまとうのはなぜだろうか？
明治期の日本人においてキ

リスト教は、江戸時代から続
いた禁教令によって邪教とし
て捉えられたことにより、非
国民といった負のイメージを
持たされていた。しかし文明
開化・富国強兵という近代化
とともに、キリスト教と新し
い生活様式・西洋文化の先端・
近代文明の基礎といったハイ
ソなイメージが観念連合し、そ
こにプラスのイメージ、憧れ
のイメージが重なった。
そこから佐藤氏は、明治文
学におけるミッション・スクー

ルを素材とする作品を四作取
り出し、分析して見せてくだ
さった。それらの作品は、まず、
田山花袋の『蒲団』。ヒロイン
は横山芳子であり、舞台は神
戸女学院である。そして、徳
富蘆花の『黒い目と茶色の目』
であり、舞台は同志社である。
山本覚馬の次女寿代がヒロイ
ンのモデルとされており、そ
こには、「飯島先生」として新
島襄も登場する。主人公は作
者自身である。三つめの作品
は、島崎藤村の『桜の実の熟
する時』であり、舞台は明治
学院である。主人公は立志を
抱いて田舎から東京へやって
きた真面目な青年であり、そ
のモデルは北村透谷と言われ
ている。ヒロインは勝子と言
い、無垢で、ハイカラで、抗
い難い魅力を持つ。

最後にもう一人のヒロイン
として、夏目漱石の『三四郎』
に登場する美彌子を上げられ
た。場所は東京本郷、主人公
は大学生の三四郎であるが、
漱石の弟子森田草平がモデル
と言われている。ヒロイン美
彌子のモデルは平塚雷鳥であ
り、二人は心中未遂事件を起
こした仲だった。その体験を
素材にして森田宗平自身が『煤
煙』という作品をものしてい

るが、漱石は「自分ならこう
描く」という意図を込めて
『三四郎』を創作した。平塚

雷鳥は「ミッション・ガール」
(ミッション・スクールに通う
女学生)ではなかったのに、
美彌子は、なぜか、キリスト
教会に通う女学生として描か
れる。そこには、教会とミッ
ション・スクールが当時持つ
ていた羨望と憧憬のイメージ、
そこからくる聖性としての女
学生のイメージが与えられて
いる。他方で、邪教だったと
いうキリスト教に対する古い
イメージから、反発と忌避に
よる魔性というイメージも、
彼女たちには付きまとう。こ
のアンビヴァレントなイメー
ジは、佐藤氏によれば、近代
社会における男性優位と女性
に対する屈折した感情を表面
に出している。

明治新政府の正統イデオロ
ギーを体現している立身出世
型青年は、まじめで、地道で、
田舎から上京してきて、故郷
に錦を飾りたいという野心を
持ち、そのために刻苦勉励し、
一生懸命であり、奮闘努力し
て勉学に励み、学力を上げよ
うとしている。そこに頑張り
に対する評価、そして、そこに
あからさまに透けて見える業

績主義をその特徴として持つ
ている。

それに対してミッション・
ガールたちは、ふまじめ、不良
性、派手、粋、都会の少女と
いう「ファム・ファタル」な
イメージであり、男性の野心
に対して無心、刻苦勉励に対
して自然体で、浮遊する自由
を持ち、芸術愛好的で、それ
ゆえ豊かな感性・感覚を持ち、
努力型ではない天才を称賛す
る人たちだった。そして女学
生が「はしたない」と言われ
た裏には、学校に行けない男
性たちのやっかみがあり、女
性がミッション・スクールで
学び、「知は力なり」という知
力を身に着けることへの反発
が、その根底にあったことも
指摘された。

とても刺激に満ちた講演会
だった。最後に、では、我が
国の「ミッション・ボーイ」
たちはどうだったのか？ 男
子校として始まった関西学院
としては、そこが問われると
ころである。また、本来のミッ
ションに立ち帰ることが、こ
れからミッション・スクール
に求められることだと結ばれ
たのはとても印象的であった。
(報告者：畠山保男 RCC 学長
直属教授)

■ プロジェクト紹介

■ 現代文化とキリスト教

キリスト教と文化研究センター長・神学部教授 水野 隆一

日本社会におけるキリスト教徒の人口は一パーセント未満と少ないにもかかわらず、キリスト教に関心のある人は多くいると言われます。キリスト教に関する書物は大手の出版社から数多く出版されていますし、『不思議なキリスト教』と題された新書はその年の新書大賞を取るほどの売れ行きでした。

そこにあるのは、「分からない」「異物として、キリスト教を「知る」ことに対する欲求だと言えますし、その欲求が低くなることはないように思われます。しかも、その場合、キリスト教そのものというより、絵画をはじめとする文化的財をよりよく理解することを動機としているように思われます。

これらの「ハイ・カルチャー」とは別に、現代文化においては、映画やマンガなどで、キリスト教を題材としたものが存在しています。これらは、

化的側面が受け入れられ、それを通してキリスト教への関心が惹起されている状況があります。

日本におけるキリスト教受容の一つの形を表すものです。そして、実際、大学生を中心とする世代は、これらのメディアを通じてキリスト教に触れ、知識を得ています。これらの「ポップ・カルチャー」、あるいは「サブ・カルチャー」におけるキリスト教の表現を、単に皮相なものとして片付けることはふさわしくないと思われます。

さらに、あいまいに「ゴスペル」と呼ばれるキリスト教音楽のジャンル（より正確には、「コンテンポラリー・クリスチャン・ミュージック」と呼ばれるのがふさわしいでしょう）が日本社会において受け入れられて久しい。アメリカにおける黒人たちの境遇から生まれた音楽が、その文化的、社会的文脈から切り離されて演奏され、聴かれていることは、注目に値します。

このように、キリスト教は、日本社会においては、まず、文

■ 東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割

キリスト教と文化研究センター副長・商学部教授 山本 俊正

本プロジェクトは今年度から開始されました。名称が長いため、通称「東アジアの平和」プロジェクトと呼んでいます。プロジェクトの趣旨、目標、研究員等は以下の通りです。

趣旨：二一世紀に入り一〇年以上が過ぎた今日、東アジアは、世界で最も高い経済成長を達成し、域内の経済は相互に強く結びついている。東アジアはお互いをかけがえない経済のパートナーとしている。しかし、他方では、近代以来の歴史的経緯から深刻な分断が続き、冷戦状況が残る中、相互信頼は非常に弱い。朝鮮民主主義人民共和国（以降、北朝鮮）と日本の国交は正常化されておらず、南北朝鮮の統一は進展していかない。北朝鮮と米国の対立も東アジアに大きな負の影響を落としている。また、中国と台湾の間の緊張関係（兩岸問題）のみならず、過去の歴史認識の相違に起因するお互いの対立感情は、各国のナ

シヨナリズムを刺激し、時として平和を脅かす「危機」として眼前に噴出する（竹島、尖閣諸島、等をめぐる領土問題）。一九九〇年代から世界を席卷した新自由主義に基づく経済のグローバル化は、東アジアにおいても、そのマインナス面として、各国内における貧富の格差の拡大とその固定化をもたらしている。また、経済発展に伴う資源やエネルギー、食糧や水の確保という課題、地球規模の温暖化、原発事故による環境汚染など、新たな紛争の要因ともなりうる火種を抱えている。これらの東アジアの平和を脅かす危機的な要素を克服していくには、どのような方策があるのだろうか。私たちは各国政府の専門家に課題を丸投げし、自らは、個人として国家の受益者か被害者として運命に身を任せるだけでよいのだろうか。東アジアの平和の構築に向けて、宗教者には何ができるのだろうか、またその役割とは何だ

■ 関西学院におけるキリスト教主義教育の展開

キリスト教と文化研究センター副長 樋口 進

るうか。国家単位を超えた主体（宗教団体・NGO、市民社会等）による平和の実現可能性はあるのだろうか。本研究プロジェクトは、東アジアにおける平和実現のための国家間の対話と協力をその視座に置くと同時に、国家以外の主体、すなわち自治体や、市民社会、NGO、宗教者等による協力及び信頼醸成の働きに注目し、その可能性を探求する。

RCCは、二〇一三年度から新たなプロジェクトを立ち上げて活動を開始したが、このプロジェクトは、継続して行われている。

キリスト教と文化研究センター規程の第二条（目的）に、「センターは、キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題に関する総合的な調査・研究を行うとともに、本学のキリスト教教育の内実化を図ることを目的とする。」とあるが、本プロジェクトは後半の部分を探索する役割がある。これは、以前あった関西学院キリスト教主義教育研究室の働きを継承するという面があるであらう。

目標：上記趣旨に基づき、これまでのRCCの平和研究及びエキユメニカルな視点を活かし、研究員の関心領域に基づき研究発表を行う。また、同領域の内外の研究者を招き、講演、ミニフォーラム等を開催し、意見交換による研究活動を実施する。

この二年間の目標を以下のように掲げ、必要な研究・作業を行うていくこととした。

成果：上記研究発表、講演、ミニフォーラム等を小冊子等にまとめる。

①キリスト教教育の内実化の検討。②『建学の精神』の冊子の編集。③「キリスト教主義教育研究室」（キ教研）の歴史とその評価。④キリスト教主義教育研究室が出している

た『キリスト教主義教育研究室年報』のPDF化。④キリスト教主義教育に関するシンポジウム。⑤チャペル活動のキリスト教教育における現代的意義と位置付け。⑥キリスト教科目のFDについての検討（宗教主事会の部会と協力して）。

本年度の第一回研究会は、五月三十一日（金）13:30-15:00、吉岡記念館会議室一で行われた。神田健次神学部教授が「キリスト教主義教育研究室の歴史」というテーマで発表され、八名の出席であった。同氏は、詳細な資料に基づきながら、

（一）キリスト教主義教育研究室の発端、（二）キリスト教主義教育研究室の歴史と活動、（三）キリスト教主義教育研究室の将来計画検討委員会、（四）大学の研究所構想検討委員会などについて詳細に語られた。これによって、われわれは漠然と思っていた「キリスト教主義教育研究室」の歴史もある程度客観的に理解することが

できた。これは、一九六七年に、「キリスト教主義教育の理論とその実践の方法とを広く研究し」、学院の教育的使命の実現に寄与することを目的として設置された、とのことである。全体の研究会のほか、教育部門研究会、歴史部門研究会、礼拝部門研究会、文化部門研究会をもうけて、活発な研究活動が行われてきた。しかし、一九九七年四月に大学の「キリスト教と文化研究センター」が発足し、この「研究室」は収束することになった。この「キリスト教主義教育研究室」をどう評価するか、また、「キリスト教と文化研究センター」との関係については、多少の見解の相違もあるであらうし、今後の課題であらう。また、『関西学院事典』の項目に「キリスト教主義教育研究室」をどう書くかということも課題であらう。とにかく、神田氏の発表によって「キリスト教主義教育研究室」の歴史が資料に基づいて、客観的に理解できたことは大きな収穫であった。

FDに関しては、大学宗教主事会の方で計画を立て、本

年度第一回研究会を七月五日（金）13:30-15:00、吉岡記念館会議室一で行った。村瀬義史総合政策学部宗教主事に、総合政策学部のキリスト教の概要とチャペルの実際について報告してもらい、研修の時をもった。

研究員は以下のとおり。コーディネイターは、RCC副長の樋口進（キリスト教と文化研究センター教授）が担当し、研究員として打樋啓史社会学部教授、村瀬義史総合政策学部専任講師、舟木讓経済学部教授、平林孝裕国際学部教授、嶺重 淑人間福祉学部教授、岩野祐介神学部准教授。

編集後記



佐藤八寿子氏のご講演は、関学における本センターの活動意義を確認する上でも大変示唆に富むものでした。現代文化、平和、キリスト教主義教育をキーワードとする、本センターの各研究プロジェクトの間にある深い関連性を意識しながら、よい研究成果の発信を求めてゆきたいと思えます。（M）